

[ASEV JAPAN 日本ブドウ・ワイン学会 25周年記念会 特集]

会長挨拶

横塚弘毅

本日、ご来賓といたしまして、アメリカブドウ・ワイン学会 Patty Saldivar 会長、日本醸造学会 児玉 徹会長、日本園芸学会代表 岩堀 修一 筑波大学名誉教授をお迎えいたしまして、ASEV Japan 創設 25 周年会を行うにあたり、ASEV Japan の四半世紀の歩みを統括し、ご挨拶にかえたいと思います。

当、ASEV Japan は 1984 年 8 月、アメリカブドウ・ワイン学会の 2 つ目の支部として設立が認められました。同じ年の 11 月、東京の学士会館にて設立総会を行って以来、25 年あまりの月日が経ちました。その間アメリカ親学会の多大なるご理解とご援助、会員の皆様方のご努力、関係学会、諸団体のご理解とご支援により当会は発展し、本日 25 周年記念会をおこなうことができましたことは感謝にたえません。

本会の設立の目的はアメリカブドウ・ワイン学会のパイオニア精神と先駆的な学術と技術を積極的に学ぶこと、また、わが国のブドウとワインに関する業績を海外に発信し、国際的な見地から学術活動を行うことによって、日本のブドウ・ワイン産業やブドウ学、ワイン学の発展に寄与することです。

本会の現在の会員数は個人会員、約 350 名、産業会員 50 社であり、個人会員のうち 116 名が ASEV 親学会の会員でございます。

ASEV Japan は最も重要な事業といたしまして、3 つの事を行ってまいりました。第一に、年次大会の開催。第二に学会誌の発行。第三に親学会代表の招待であります。年次大会は設立総会を行った翌年の 1985 年から始まりました。

大会は日本の北から、北海道池田町、弘前市、山形市、東京都、千葉市、甲府市、奈良市、京都市、岡山市、東広島市と日本の主要なブドウ・ワイン産地で開催され、学会の活動を広く知っていただくよう努力してまいりました。大会での最初の 5 年間の発表数後は 1 年間に平均 5 題でしたが、1990 年以降この大会までに今までの 21 年間の平均発表数が 18 題で多くのオリジナルな論文が発表されてまいりました。年次大会

の特徴は、若手が発表する全ての論文を大会座長がその場で審査し、大会当日の最後に審査・集計を行い、大会発表賞を授与していることとあります。本日までに 10 人の若手研究者、技術者が荣誉に輝きました。

次に学会誌ですが、学会誌は ASEV Japan Newsletter といたしまして、ついで ASEV Japan Report と名称を変え、1990 年からは、現在の Journal of ASEV Japan となりました。年 3 回発行し、そのうち 1 回は大会特集号、残りの 2 回は論文誌で年平均の掲載論文数は 5 報であります。最近の傾向としては、英語論文が増えていることとあります。2001 年から学会誌に発表された、優れた論文に対して表彰を行い、6 つのテーマに対して論文賞が、また、4 つのテーマに対して技術賞が贈られました。編集委員会は近畿大学、岡山大学、千葉大学に順次担当していただき、当学会の方針が事務局本部がある山梨大学に偏らないように配分してもらいました。同時に財務と総務担当の常任理事を企業に所属する会員にさせていただくなど、産学官からバランスよくお知恵を拝借してきたことも、本会の特徴でございます。

さて、第三の事業は ASEV 親学会の招待であります。今まで 11 人の ASEV 代表をお迎えしました。民間出身が 6 人、カリフォルニア大学教授が 5 人でした。招待した代表には、特別講演をお願いし、実用性に優れ、また、学術性の高い講演をしていただきました。

今まで申し上げましたように、小さな学会で財政規模が小さいにもかかわらず、比較的大きな事業を行えたのは会員の皆様、とりわけ今までの 9 人の会長、26 人の大会委員長、常任理事、監事、(みき) 幹事、編集委員と多くの役員の方々の献身的なご奉仕に支えられたおかげであると思っております。このような方々のご努力に対し、感謝の意を示すため、2001 年に功績賞、功労賞が設けられました。過去、カリフォルニア大学名誉教授 シングルトン 先生に特別功績賞が、近畿大学の米虫先生に功労賞が贈られ、今年には千葉大学の松井

先生に、山梨大学の松土先生、カリフォルニア大学のリエ・イシイ・ルソー先生が授与されました。

わが国のブドウ・ワイン産業は歴史が浅く、学術的蓄積が十分ではありません。高温多湿の気候の中でのブドウ栽培が必要であるとともに、また、安価な外国産ブドウ原料や、安価な輸入外国産ワインがあふれております。これらに挑戦し、打ち勝たなければなりません。このために産学官が一致協力し、関連する分野の

研究者、技術者を育て、これらの方々が中心となって学術及び産業の量と質を高める必要がございます。本学会がその核の一つとして活躍し、学術・産業の発展に寄与していただくよう切にお願い申しあげさせていただきます。

本日は大変お忙しい中 25 周年記念会にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

挨拶

日本醸造学会長 児玉 徹
(東京大学名誉教授)

ご紹介頂きました日本醸造学会の会長、児玉でございます。本日は、日本ブドウ・ワイン学会創立 25 周年記念会にお招きいただき、ご挨拶を申し上げる機会を与えて頂きましたことを大変光栄に存じております。日本醸造学会を代表いたしまして日本ブドウ・ワイン学会が、このたび創立 25 周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。本当におめでとうございます。

私もこの間、4 年間、本学会の運営に携わってきたものと致しまして、喜びを禁じえないものでございます。日本ブドウ・ワイン学会は、日本醸造学会と同じく酒類の醸造に関する学術研究の向上を目指す学術団体として多くの共通の、二つの学会が共通の会友を持っているということを認識しているものでございます。

ただ、日本醸造学会は母体となっております日本醸造協会の歴史は 100 年以上にわたって古いのでございますけれども、実は、学会といたしましては、本学会よりも約 3 年遅く、1987 年に発足しております。学会としては、むしろ弟分という形になっているわけでございます。

ASEV Japan がこの 25 年間にいくつかの点で他に類を見ない特徴を持って醸造業界に、学会を置く業界に大きな貢献をされてきたということに対して、僭越でございますけれども深い敬意を表するのでございます。

研究の方向性と致しましては、日本醸造学会におきましても酒類の醸造のみならず、原料となります酒米ですとか、あるいはブドウというようなものに関する

研究を行ってきてはおりますけれども、主流がどうしても醸造関連の研究になるということは、まあ、否めない状況でございます。これに対しまして、ASEV Japan が醸造業界にもたらしました最も大きな貢献はワインという必ずしも日本の古来のものでない酒を対象と致しまして、近年まであまり上質とは言えなかった日本国産のワインの質をブドウ栽培の成果も含めまして極めて短期間で格段に向上させたということが大きな寄与であったのと感じている次第でございます。

これに関しましては、ASEV Japan の設立によって、ブドウ栽培とワインの醸造の研究が一体化されまして、双方の研究者や実務者が成果を発表する場が作られたということですが、あるいは、国産ワインコンクールが創設されたというようなことが要因として挙げられますけれども、何よりも第一にそれらを中心になって進められた現会長の横塚弘毅先生のご尽力の賜物と存じる次第でございます。

すなわち、横塚先生がワイン先進国である、アメリカのシステムの導入に努力されまして、本学会を ASEV の日本チャプターとして創立されるとともに、長年にわたってエクゼクティブディレクターとして ASEV と協力関係を保ちながらも強い信念をもって日本国産ワインの品質向上を目指してこられた成果がわが国のワイン業界の現在を生み出したものと考えております。

個人的なことで、恐縮でございますけれども、私は、2001 年から 2004 年まで本学会の会長を務めさせて頂

きましたけれども、その間、エクゼクティブディレクターとしての横塚先生の持っておられる信念に常々感銘を受けておりました。

その中でも、ASEV Japan のミッションの一つとして育てておりました ASEV の代表者の大会での、先ほどおっしゃいましたけれども、招待を私の在任中 4 年間に 2 回にわたって行うことができた。2001 年には、ASEV の前会長であられました、当時は、理事でおられましたけど、クリスチャン・ブツケ (Christian Butzke) 博士、それから 2004 年にはマーチン・モトユキ博士をお迎えしたこと、また、幸いにも当時、懸案でございました日本学術会議への学術研究団体としての登録が 2002 年に認められたということ、また、2003 年に、先ほど申しました、国産ワインコンクールが創設された

ということが、懐かしく思い出される出来事でございます。

最後になりましたが、日本醸造学会におきましては、昨年「若手の会」を新設いたしまして、もっか国内外の若手研究者で交流を深めまして、醸造学研究の活性化を目指しているところでございます。

私どもといたしましては、今まで以上に ASEV Japan の、特に若手の方々と共に手を携えて、ワイン醸造に、ブドウ栽培の分野で研究をますます活性させて発展させることを期待しているところでございます。今後ともどうぞよろしくお願いを申し上げます。大変失礼ではございますけど、これをもってお祝いの挨拶に変えさせていただきます。本日は、誠におめでとうございました。

挨拶

園芸学会代表 岩堀修一 (元園芸学会会長)
(筑波大学名誉教授)

ただ今ご紹介いただきました、岩堀でございます。このたび、日本ブドウ・ワイン学会が創立 25 周年を迎えられましたこと、おめでとうございます。園芸学会を代表いたしまして心より、お祝い申し上げます。

ご案内の通り、ブドウは世界的にみて生産量が 1、2 を争う果樹であります、その大部分はワイン用で、生食用は比較的僅かであります。

私事ではありますが、私は 1966 年からカリフォルニア大学の、Department of Viticulture and Enology にポスドクとして 1 年間留学しておりました。そこで私は、ワインを味わうという楽しみを覚えたのですが、そこでは生食用のブドウの他に、ワイン用ブドウの研究も勿論行われておまして、ワイン用のブドウの場合ですと、施肥試験とか灌水量の試験では、ブドウを収穫してワインをつかってその成分の分析、試飲による官能試験まで行って、初めて試験が完了しえるというのを見てきました。これは勿論、当たり前なことだと思うのですが、今まで生食用のブドウのことばかり頭にあった私には驚きでした。

日本におきましても、ブドウは主要果樹の 1 つであります、近年までブドウはほとんど生食用として栽

培され、ワイン用はごくわずかでありました。そして研究におきましても、ワイン用ブドウに関するものはほとんどありませんでした。

園芸学会は大正 12 年、1923 年に創立されたのですが、園芸学会雑誌をしてみると、1923~45 年までの戦前にはブドウの研究論文 20 篇のうち、ワイン用ブドウに関する研究は、川上善兵衛氏の生食・ワイン用両用品種のマスカット・ベリー A を含むブドウの育種の論文 1 篇のみであります。そして、1945~1972 年までの 27 年間ではブドウの論文は約 50 篇出されておりますが、その内ワイン用ブドウに関する論文は 1950 年代に 1 篇、60 年代に 2 篇のワイン用ブドウの栽培試験のものがあるのみです。1980 年代にいたって、6 篇のワイン用ブドウの品種特性や成分分析の論文が出されています。

しかし、近年、食生活の多様化に伴って、ワインの消費ものび、外国産のワインの輸入が増えるとともに、国産のワインも古くからの産地の山梨県を中心に全国各地でかなりつくられるようになりました。このような中、1984 年に日本ブドウ・ワイン学会が設立されたことはまことに時宜を得たものであると言えま

よう。

日本ブドウ・ワイン学会誌を拝見いたしますと、生食用ブドウに関する論文もさることながら、ワイン用ブドウの品種、栽培、果実成分やワインの品質など、多くの論文が、醸造に関する論文と共に掲載されています。学会が、ワイン産業に大きな貢献をしていることがうかがわれます。

これからも、町おこしなどで、地域特産のワイン用に適したブドウの栽培や、ワインの製造が盛んになっ

ていくものと思われます。日本ブドウ・ワイン学会の役割は今までも増して、重要になってくるのではないのでしょうか。

日本ブドウ・ワイン学会の今後の一層のご発展を願いますと共に、園芸学会との交流が、もっともっと緊密になることを望んでおります。

簡単ではございますが、これもちまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとうございます。